

「新共同訳」

マタイ22章15―22節

15 それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、畏にかけようかと相談した。

16 そして、その弟子たちをヘロデ派の人々と一緒にイエスのところに遣わして尋ねさせた。

「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。

17 ところで、どうお思いでしょうか、お教えください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。」

18 イエスは彼らの悪意に気づいて言われた。「偽善者たち、なぜ、わたしを試そうとするのか。19 税金に納めるお金を見せなさい。」

彼らがデナリオン銀貨を持って来ると、

20 イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。21 彼らは、「皇帝のものです」と言った。

すると、イエスは言われた。「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」22 彼らはこれを聞いて驚き、イエスをその場に残して立ち去った。

マルコ12章13―17節

13 さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。

14 彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。

ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」

15 イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」

16 彼らがそれを持って来ると、

イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、

17 イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

〔直訳〕

15 そのとき 行つて ファリサイ派の人々が 協議を 取った

どのように 彼を 彼らが畏にかける 言葉において。

16 そして 彼らは遣わす 彼に 彼らの弟子たちを へロデ党の者たちと共に 言いつつ、

「先生、私たちは知っている 次のことを

真実な方で あなたはある

そして 神の道を 真実において あなたは教える

そして 気がかりではない あなたに 誰についても、

なぜならあなたは見ない 人間たちの顔の中へ、

17 それで言つてください。私たちに

何と あなたに 思われる。

許されるか 与えることは 税金を 皇帝に あるいは 否か」。

18 だが悟つて イエスは 彼らの悪意を 言った、

「なぜ 私を あなたがたは試す、偽善者たちよ、

19 示しなさい 私に 税金の硬貨を」。

だが彼らは 持つて来た 彼に デナリオンを。

20 そして 彼は言う 彼らに、

「誰のか この肖像は そして 銘は」。

21 彼らは言う 彼に、

「皇帝の」。

そのとき 彼は言う 彼らに、

「それで返しなさい 皇帝のものを 皇帝に

そして 神のものを 神に」。

22 そして 聞いて 彼らは驚いた、

そして 残して 彼を 彼らは立ち去った。

① 偽善者たち (15―19節)

①a 「ファリサイ派の人々」

イエスはエルサレムの神殿から商人を追い出した(二二 12)。そのことを不服に思う祭司長や長老たちはイエスに「何の権威で」そのようなことをするのかと問いたです(二二 23)。21章 28節

― 22章 14節に述べられる三つのたとえは、この祭司長と長老たちに向けられている。この段落はイエスが三番目のたとえ(「婚宴のたとえ」)を語り終えた後に、ファリサイ派の人々が取った反応を述べている。イエスの論争相手は祭司長や長老たちに代わって、ファリサイ派の人々になる。

①b 「協議を取った」

ファリサイ派は12章14節にも登場し、安息日に癒しを行ったイエスを見て、彼を殺す相談をしていた。マルコの並行箇所(一二13―17)と比較すると、ファリサイ派の邪悪さがマタイではいっそう強調されているのが分かる。マルコ12章13節は「人々は、…陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした」と述べており、ファリサイ派はヘロデ党の人々と共に派遣された者でしかないが、マタイではファリサイ派がイニシアチブを取って、イエスを罠に陥れようとしている。

© 「ヘロデ党の者たち」

㉞この語はヘロデ家の支持者を表し、新約聖書での用例は3回だけである(マコ三6、一二13)。ヘロデ大王はローマ帝国の統治者に取り入り、ユダヤの王に任命され、ハスモン家を倒して、ユダヤに君臨した。ヘロデ大王が紀元後4年に没した後は、王国は三人の息子に分割される。アルケラオがユダヤ・サマリアを、その実弟ヘロデ・アンテパスがガリラヤとペレアを、異母兄弟のフィリポがイトラヤとトラコンを統治した。アルケラオは過酷な統治をしたため、民衆からローマ皇帝に訴えられ、紀元後6年に追放されてしまう。その後、彼の領地は皇帝所管の属州ユダヤとなり、ローマ人総督の支配下に置かれる。ヘロデ党は、ローマによる支配を容認した上で、ローマ総督ではなく、ヘロデ家の者が統治することを望んでいた。

㉟ここに登場するヘロデ党がヘロデ家のどの王を支持しているのか明らかではないが、ヘロデ・アンテパスか、ヘロデ大王の孫の一人アグリッパ一世だと思われる。アグリッパ一世はフィリポが死んだ後、その領地を任され、アンテパスが失脚した後には、その領地をも与えられ、41年には、ローマへの功績が評価され、ユダヤ・サマリアも与えられた。こうして、かつてのヘロデ大王の領土全体がアグリッパ一世のものとなった。アンテパスもアグリッパ一世も、ファリサイ派を尊重することによって、民心の掌握に努めた。特にアグリッパ一世は、ヨハネの兄弟ヤコブを殺害し、ペトロを投獄しているが(使一二1以下)、彼の狙いがファリサイ派の歓心を買うことにあつたのは明らかである。

㊀ 「彼らは遣わす 彼に 彼らの弟子たちを ヘロデ党の者たちと共に」

16節によると、ファリサイ派は、ヘロデ党をも巻き込んで、イエスを陥れようとしているが、ローマへの納税問題への両者の態度は一致してはいたわけではない。ヘロデ党はローマの支援によるヘロデ家による支配を熱望していたから、納税には賛成していた。一方、ファリサイ派は原則的には納税に反対していたが、現実主義でもある彼らは、神から課せられた重荷として実際には納税していた。このように立場の違う者が手を組んだのは、イエスの排除という目的では一致したからである。

㊁ 「先生」

㊂動詞デイダスコ(「教える」と同根の名詞デイダスカロス。「先生・教師」の意味。この語はまず、ユダヤ教の律法の教師(ラビ)を指す(ヨハ一38を参照)。福音書では、律法学者(ルカ二46)、洗礼者ヨハネ(三12)、ニコデモへの用例を除けば(ヨハ三10)、もっぱらイエスに使われる。

㊃イエスを「先生」と呼ぶのは、弟子たちである(マコ四38、九38など)。洗礼者ヨハネの弟子たち(ヨハ一38)、マルタ(二一28)、マリア(二〇16)、イエスに「永遠の命を受け継ぐには何をしたらよいか」と尋ねる人やニコデモのようにイエスに教えを請う者(マコ一〇17・20並

行、ヨハ三2)、イエスにいやしを頼む人々も(マコ五35並行、九17)、イエスに「先生」と呼びかける。

㊦また、イエスの行動をとがめたり、イエスを試したり、言葉じりをとらえて陥れようとする人々も、イエスを「先生」と呼ぶ。マタイ福音書では、このようにイエスに敵対する人々がイエスを「先生」と呼ぶことが多い。イエスが徴税人や罪人たちと食卓を囲むのを見たファリサイ派(マタ九11)、イエスにしろしを求める律法学者とファリサイ派(一二38)、神殿税を集める人々(一七24)、復活を否定するサドカイ派などが、そうである(二二24)。

㊧さらに、この呼び名はイエスが卓越した「教師」であることを表したり(マタ二三8)、「主」(キュリオス)という呼び名と一緒に使われることがある(ヨハ一三13・14)。これらの用例は、イエスがメシアであることを言い表す称号に近づいている。

㊨「神の道を 真実において あなたは教える」

マルコはイエスが「真実な方で、だれをもはばからない方」であることを強調している(二二14a)。しかし、マタイでは、16節の五行目にあるように、「神の道を真実においてあなたは教える」を前に移動させており、「真実な方で、神の道を教える」ということを強調している。さらに、17節の「言ってください私たちに」はマルコにはない。新共同訳はこれを「お教えください」と訳す。

㊩「税金」

紀元後6年にローマ総督がユダヤに置かれたとき、人頭税が義務づけられた。人頭税の税額は不明だが、全員に同額が課せられたと推測される。ローマへの納税は、ユダヤ人には経済問題であると同時に、宗教的な問題でもあった。というのは、ローマ皇帝は神格化され始めており、そのような者への納税はイスラエルの神への背信行為だったからである。特に「神への熱心」をモットーに、死すべき人間のいかなる支配をも認めない熱心党は、ローマへの納税を拒否し、反乱運動を組織することすらあった。そのような状況の中で、持ち出された納税問題であるから、イエスが肯定の答えを出せば、民衆の支持を弱めることができ、否定の答えを出せば、ローマへの反徒として告発できる。イエスを排除したいと考える者にとって、納税問題は格好の餌となりえた。

㊪「許されるか」

この語(エクセステイン)は、法に従って許される、あるいは禁止される事柄を表すための言葉。パウロがこの言葉を使って、『すべてのことが許されている。』しかし、すべてのことがわたしたちを造り上げるわけではない(一コリ一〇23)と述べているように、キリスト者は「許されているかどうか」という法の次元での行動基準を越えた、より高次の基準(パウロにとっては共同体を造り上げることを)を持っている。しかし、ファリサイ派にとっては、文字としての律法がすべてであり、それに適っているかどうかを問題にする。

㊫「偽善者」

㊬マルコとルカの並行箇所では、この「偽善者たち」が欠けている。マタイにとって、ファリサイ派はイエスを拒絶する旗がしらであるだけでなく、口ではイエスは神の道を教える者と述べて教えを乞う振りをしながら、罾を仕掛ける「偽善者たち」である。マタイはここでもファリサイ派の邪悪さを強調している。マルコの15節「イエスは、彼らの下心を見抜いて」で、「下心」と訳されているのは「偽善者」と同族の言葉であり、「みせかけ・偽善」を意味する。

㊭「偽善者」と訳されるヒュポクリテースは、古典ギリシア語の元来の意味は「演劇の役者」。

この意味が悪いほうに転じて、「うわべを偽る者・偽善者」を表す。聖書の述べる「偽善」は、本心を隠して上辺を繕う態度のことだけではなく、そのような態度の根底にある神を否定する心をも指す。「偽善者」という語は新約聖書に18回用いられるが、そのうち14回はマタイでの用例であり、律法学者やファリサイ派への呼称として使われている。

⑦昔の人の言い伝えに従って清浄の掟を守るファリサイ派や律法学者は、イエスの弟子たちが食前に手を洗わないことを非難する。そのときイエスは彼らを「偽善者」と呼び、イザヤ29章13節を引いて、「この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから離れている。人間の戒めを教えとしておしえ、むなしくわたしをあがめている」と言う。なぜなら、彼らはイザヤの預言どおり「神の掟を捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている」からである（マコ7・8）。

この用例が示すように、偽善者とは口先では神を敬うが、現実の生活では神から離れて行動する者を意味している。ほかの箇所でも、イエスはこの呼び名をファリサイ派や律法学者に当てはめている。偽善者は人に見てもらうために、会堂・街角などの目立つ場所で施しや祈りを行い（マタ6・2・5）、沈んだ顔をして断食をする（マタ6・16）。

①「示しなさい 私に 税金の硬貨を」

⑦ファリサイ派からの使いは、「示しなさい」というイエスの求めに応じて、デナリオン銀貨を差し出す。ローマのデナリオン銀貨には、当時、神格化されつつあったローマ皇帝の像が刻まれていた。神の像を刻むことは、十戒の第二戒に触れる。さらに、異教徒のローマ皇帝を神と認めることは神を冒瀆する行為であった。

①しかし、彼らは銀貨を差し出すことによって、日常生活では何の疑問も抱かずにローマの銀貨を使用していることを暴露する。彼らは日常生活では貨幣に刻まれた皇帝の像を取り立てて問題にせず、神の教えから離れ、利害を優先させる生活を送っている。しかし、イエスを畏にかけるためには、ローマへの納税と神への信仰を問題にして、敬虔ぶる偽善者である。マタイ23章では、イエスは律法学者とファリサイ派を繰り返し偽善者と呼んで、神から離れた彼らの生き方を列挙し、厳しく批判している（13・14・15・23・25・27・29節）。

## ②神のものは神に（20—22節）

①「誰のか この肖像は そして 銘は」

⑦イエスは、彼らが「口先では神を敬うが、心は遠く離れている」偽善者であることを見破り、反対に問い返す。イエスを陥れるために派遣された者たちは、イエスから「この肖像と銘は誰のか」と問われるが、当然、彼らは「皇帝の」と答えることになる。このように答えることによって、彼らは無意識のうちに自分の実相をあらわにしている。

①というのは、ローマ皇帝を神の子とする銘が刻まれた貨幣を持ち歩いている彼らは、神の心から遠く離れて生きているのであり、ローマ皇帝に属するもの、つまり「皇帝のもの」になっただけで、地上の組織を維持することに懸命になるあまり、イエスに背を向け、神の心を教えるメシアを排除しようとしている。

①「返しなさい 皇帝のものを 皇帝に そして 神のものを 神に」

⑦この言葉を巡って、様々な解釈が行われてきた。

- i 神の似像である人間全体は神のものであり、神への従順は国家への従順よりも上にある。
- ii 国家への従順と神への従順は切り離されない。外面の従順と内面の従順を区別する。
- iii 国家への従順だけがここでの主張であり、「神のものは神に」は付録である。
- iv 国家への従順ではなく、神への従順が求められている。

①この言葉は、ローマ13章1節「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです」に見られるような、皇帝の支配は神が立てたものという理解を示していない。納税に関しては、貨幣に皇帝の肖像と銘があるということを示すだけである。ファリサイ派の人たちは日頃からローマへの納税のための貨幣を持っており、すでにローマに納税しているのだから、納税を問うのは彼らの悪意の表れであることを明らかにしている。

②「神のものを神に返しなさい」にイエスの主張の要点がある。創造世界に生きるものすべては神のものであり、神への従順は他のすべての命令を超えるものである。イエスを陥れようとして策略を巡らす敵対者たちは、主は神であることを忘れているという事実を明らかにする。

③彼らの取るべき態度は、「皇帝のものを皇帝に」返し、「神のものを神に」返すということである。もし彼らが「神のもの」であるなら、「皇帝のもの」としての生き方に決別し、神の似像として造られた「神のもの」として生きるべきなのである。「肖像」と訳される語は「造り主の姿に倣う新しい人」(コロ三10)で「姿」と訳されており、「似姿」をも表す。

④敵対者たちはイエスの言葉を聞き、「イエスを残して立ち去った」。自分たちの悪意と実相を見抜かれたからである。

### ③ 神のものとして真実に仕える

①ファリサイ派の人々は、弟子たちをヘロデ党の者たちと共に派遣し、ローマへの納税の是非をイエスに尋ねさせる。この問いは抜かりなく仕組んだ罠であった。納めるべきだと答えれば、イエスはローマの支配を認め、神以外のものを神とする不信仰者だと喧伝し、その人氣に水をさすことができる。逆に否定すれば、ローマへの反徒としてイエスを訴えることができるからである。

②遣わされた者たちはイエスを「先生」と呼び、イエスが「真実な方で」、「真実において」神の道を教えている、と心にもないことを言う。さらに、彼らはイエスが神の思いに合った教えを、人の顔色をうかがわずに語っていると持ち上げ、「お教えください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていませんか」と罠を仕掛ける。しかし、彼らの悪意に気づいているイエスは、「偽善者たちよ」と応じ、「税金に納めるお金を見せなさい」と命じる。彼らが「偽善者」なのは、お世辞を口にして近づいたからというよりは、日常生活ではローマの硬貨を平気で用いながら、納税問題になると一変して敬虔ぶるからである。

③「皇帝のものは皇帝に」というイエスの教えは、納税問題への回答であるが、同時に神殿からの退去命令とも言える。なぜなら、普段、「皇帝の」肖像と銘の入った銀貨を持ち歩いている彼らは、「皇帝のもの」に同化していると言えるからである。

④イエスが「神のものは神に」と加えたのは、世俗の権力を神格化することを拒絶すること、また銀貨に皇帝の像が刻まれているように、人間には神の像が刻まれていることを思い起こさせることによつて、神に「真実において」仕えるようにと招くためである。